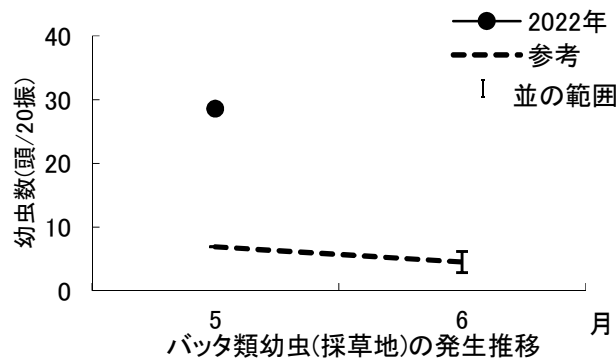


作物	さとうきび		地域	宮古群島
病害虫名	バッタ類			
調査結果	5 月の発生量 (平年比)	—		
予報	5 月からの増減傾向	—		
	6 月の発生量 (平年比)	—		
予報の根拠				

調査結果


今期と平年の推移



・発生種：台湾ツチイナゴ

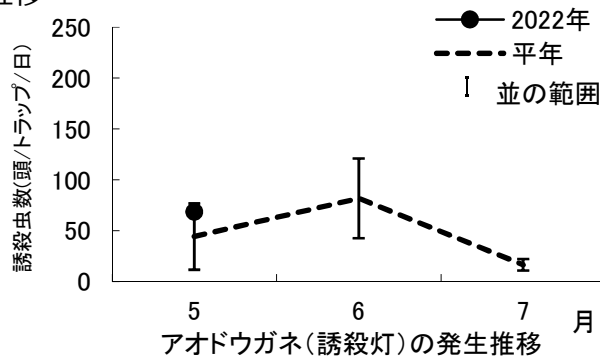
防除のポイント

- ・発生源となるほ場及び周辺のイネ科雑草の除草を徹底する。
- ・幼虫期の防除が効果的なので、6月にほ場周辺の見回りを行い幼虫の早期発見・防除に努める。

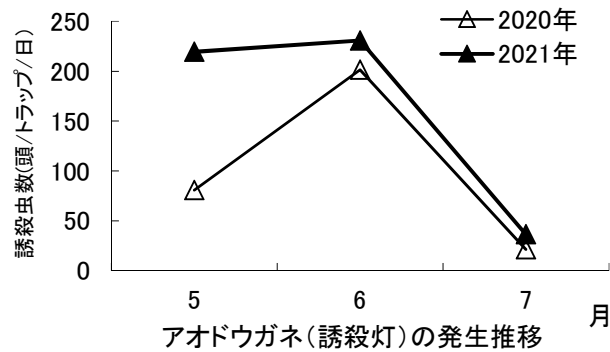
作物	さとうきび	地域	宮古群島
病害虫名	アオドウガネ		
調査結果	5 月の発生量 (平年比)	並	
予報	5 月からの増減傾向	↗	
	6 月の発生量 (平年比)	並	
予報の根拠		平年の発生量の推移 (↗)	

調査結果

今期と平年の推移




過去2年の推移

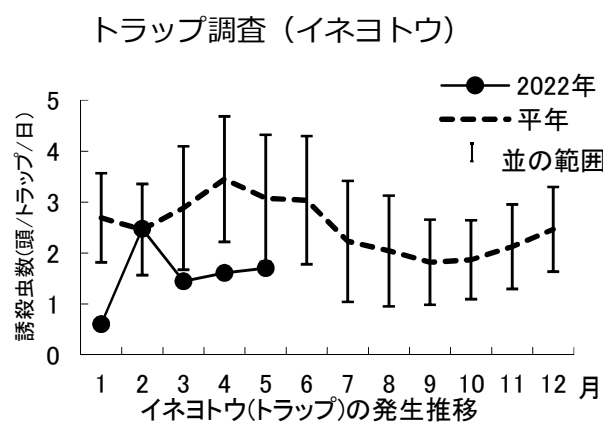
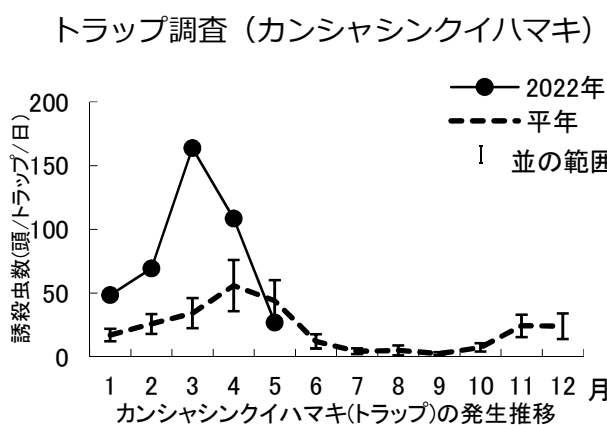
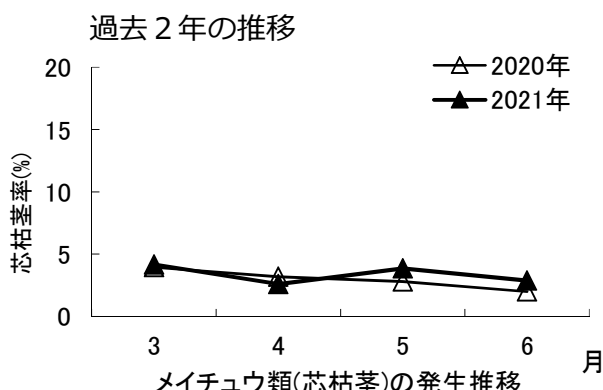
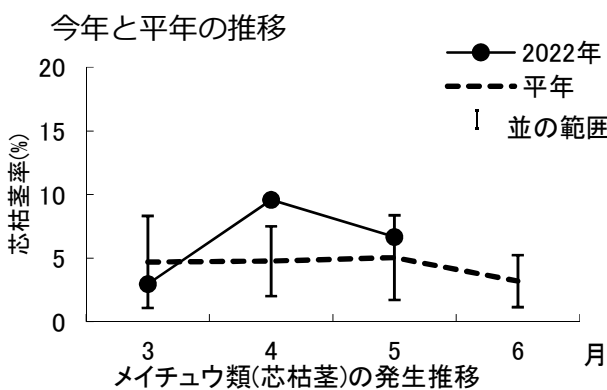


防除のポイント

- ・サトウキビにおけるアオドウガネ被害は、土壤中に生息する幼虫が9月～11月頃作物地下部を食害することにより生じ、収穫期の立枯による減収や株出不萌芽の原因となる。
- ・成虫は5～7月に出現し、テリハクサトベラ等植物の葉を集団で摂食する。食餌植物上で交尾した後地中0～10cm深に産卵する。
- ・成虫発生時期の誘殺灯による大量誘殺、6～9月の幼虫若齢期の薬剤処理及び収穫後のロータリー耕による防除を実施する。

作物	さとうきび	地域	宮古群島
病害虫名	① メイチュウ類(カンシャシクイハマキ・イネヨトウ)		
調査結果	5 月の発生量 (平年比)	並	
予報	5 月からの増減傾向	↓	
		6 月の発生量 (平年比)	並
予報の根拠		芯枯茎率の平年の発生量の推移 (↓)	

調査結果



- ・発生ほ場率：90.0% (平年値：81.0%)
- ・茎内で派生したメイチュウ類のうち、100% (3/3頭) がカンシャシクイハマキであった。

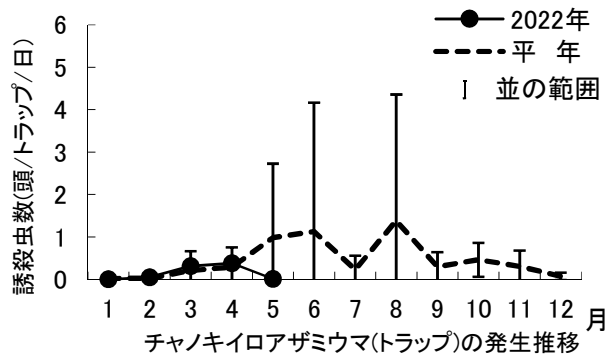
防除のポイント

- ・ふ化した幼虫は、葉裏や葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ茎を枯死させる。
- ・加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、培土時および生育初期の防除を徹底する。
- ・ほ場内外のイネ科雑草は発生源となるため除去する。
- ・乳剤の場合は、葉鞘内に薬液がきちんと浸透するように丁寧に散布する。粉剤の場合は、茎と葉元の間散布し降雨や散水等により溶解させ、葉鞘内部へ浸透させることで防除効果が高まる。
- ・植え付け時及び培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選択し施用する。

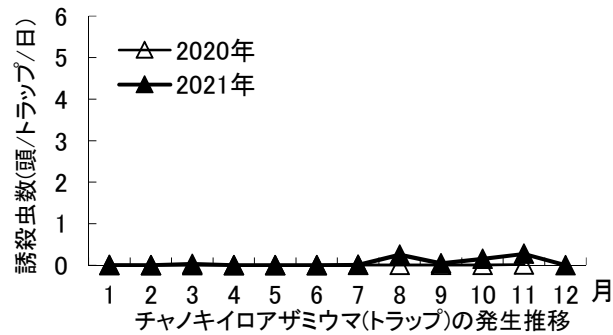
作物	マンゴー	地域	宮古群島
病害虫名	チャノキイロアザミウマ		
調査結果	5 月の発生量 (平年比)	並	
予報	5 月からの増減傾向	-	
	6 月の発生量 (平年比)	-	
予報の根拠			

調査結果

今期と平年の推移



過去2年間の推移




・トラップ調査による発生施設率：20.0% (平年値：46.7%)

防除のポイント

- ・ 不要な新梢は本種の発生を助長するので、早い時期に除去する。
- ・ コミカンソウ類など、発生源となる施設内外の雑草を除去する。
- ・ 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

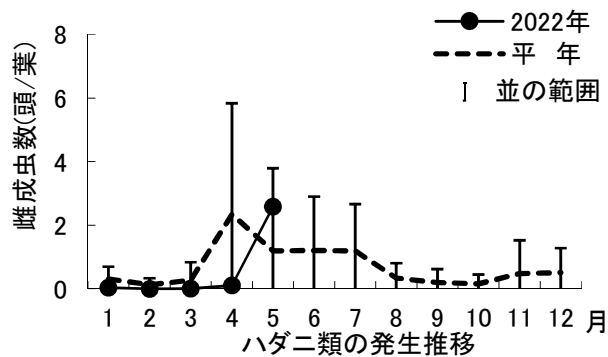


ナガエコミカンソウ

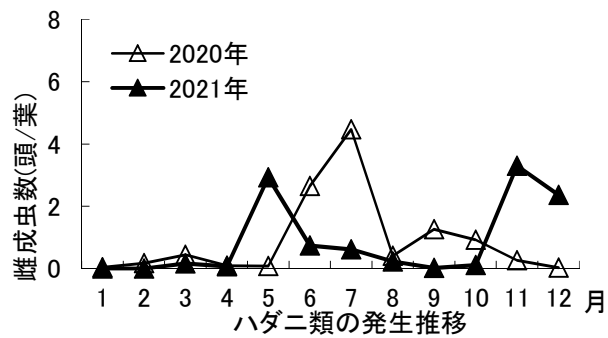
作物	マンゴー	地域	宮古群島
病害虫名	① ハダニ類		 <p>シュレイツメハダニ</p>
調査結果	5 月の発生量 (平年比)	並	
予報	5 月からの増減傾向	→	
	6 月の発生量 (平年比)	並	
予報の根拠		平年の発生量の推移 (→)	

調査結果

今期と平年の推移



過去2年の推移



・発生施設率：20.0% (平年値：38.8%)

防除のポイント

・薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。



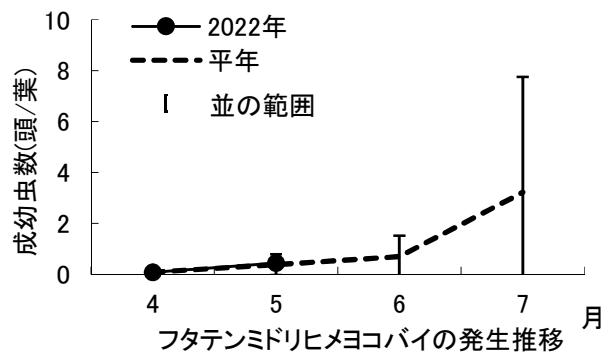
ハダニの寄生による葉のかすれ症状

作物	オクラ	地域	宮古群島
病害虫名	① フタテンミドリヒメヨコバイ		
調査結果	5 月の発生量 (平年比)	並	
予報	5 月からの増減傾向	↗	
	6 月の発生量 (平年比)	並	
予報の根拠		平年の発生量の推移 (↗)	

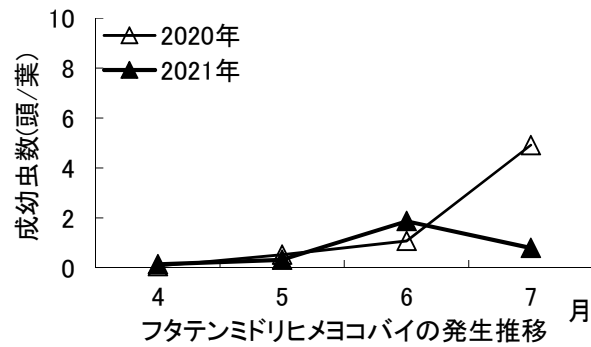


調査結果

今期と平年の推移



過去2年間の推移



発生ほ場率 : 60.0% (平年値 : 63.6%)

防除のポイント


- ・多発すると被害葉は黄変萎縮するので、葉裏を観察し、早期発見・防除に努める。



幼虫



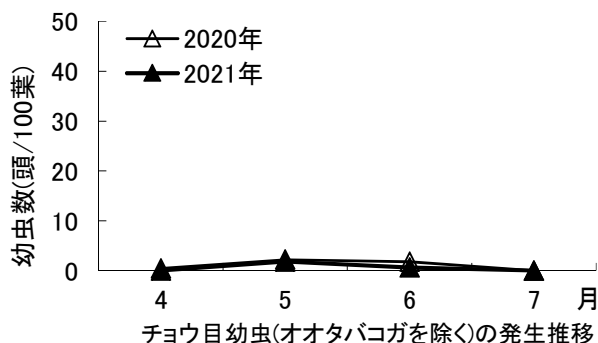
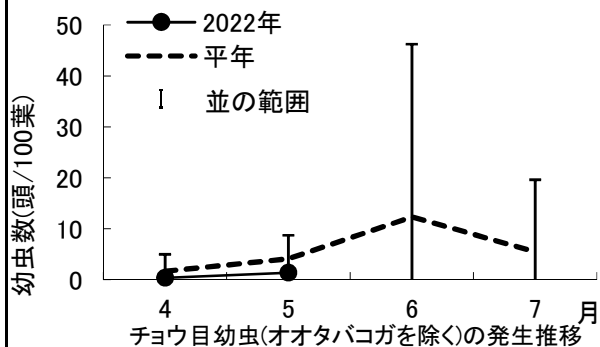
被害葉

作物	オクラ	地域	宮古群島
病害虫名	② チョウ目幼虫(オオタバコガを除く)		 <p>ワタノメイガ</p>
調査結果	5 月の発生量 (平年比)	並	
予報	5 月からの増減傾向	↗	
	6 月の発生量 (平年比)	並	
予報の根拠		平年の発生量の推移 (↗)	

調査結果

今期と平年の推移

過去 2 年間の推移




発生ほ場率 : 40.0% (平年値 : 40.9%)

発生種 : ワタノメイガ、台湾キドクガ、ハスモンヨトウ、ワタアカキリバ

防除のポイント

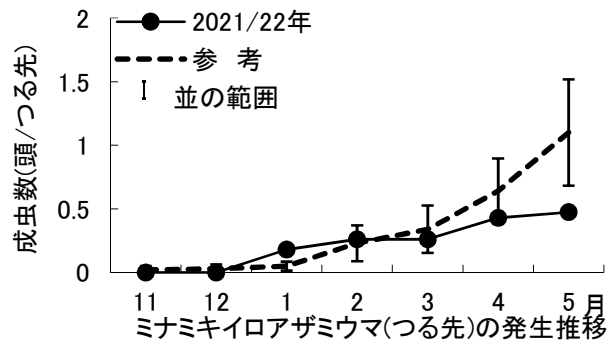
- ・発生密度が低い場合は、捕殺が有効である。
- ・葉裏の幼虫に対しては薬剤効果が低減するので、若齢幼虫期のかすり状被害を発見したら、速やかに薬剤を散布する。



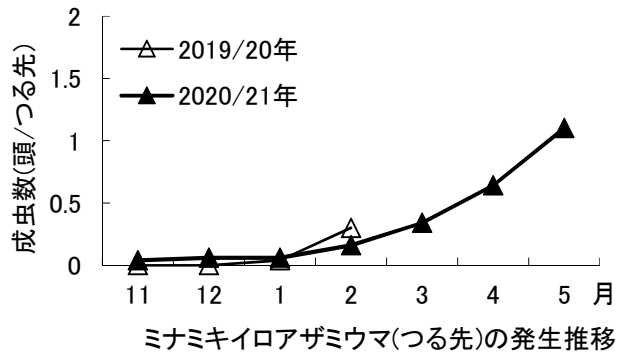
作物	とうがん(施設・立体栽培)	地域	宮古群島
病害虫名	ミナミキイロアザミウマ		
調査結果	5 月の発生量 (平年比)	—	
予報	5 月からの増減傾向	—	
		6 月の発生量 (平年比)	—
予報の根拠			

調査結果

今期と平年の推移



過去2年間の推移



- ・発生施設率：75.0%（平年値：75.0%）
- ・立体栽培でのデータの蓄積が不十分なため判定は行わず、調査結果のみ掲載

防除のポイント

- ・施設周辺の雑草は発生源になるので除草を行う。
- ・多発すると防除が困難になるので、つる先を観察し早期発見・防除に努める。
- ・薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

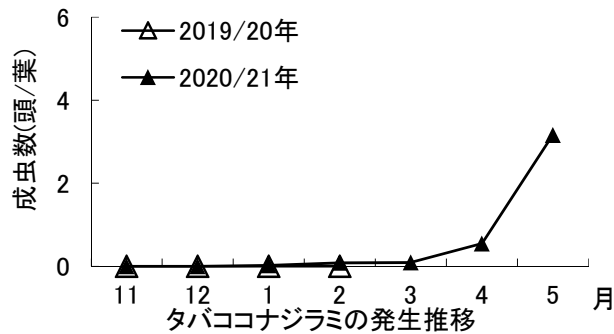
作物	とうがん(施設・立体栽培)	地域	宮古群島
病害虫名	タバココナジラミ		
調査結果	5 月の発生量 (平年比)	—	
予報	5 月からの増減傾向	—	
	6 月の発生量 (平年比)	—	
予報の根拠			

調査結果

今期と平年の推移




過去2年間の推移



- ・発生施設率：25.0% (平年値：75.0%)
- ・立体栽培でのデータの蓄積が不十分なため判定は行わず、調査結果のみ掲載

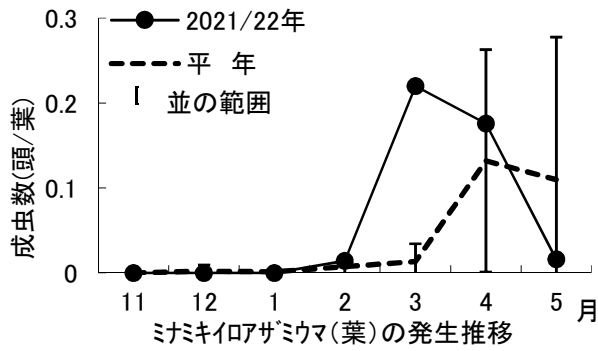
防除のポイント

- ・施設周辺の雑草は発生源になるので除草を行う。
- ・多発すると防除が困難になるので、葉裏を観察し早期発見・防除に努める。
- ・薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

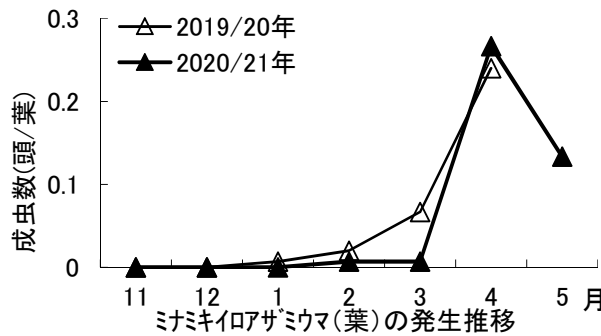
作物	ゴーヤー(施設)	地域	宮古群島
病害虫名	ミナミキイロアザミウマ		
調査結果	5 月の発生量 (平年比)	並	
予報	5 月からの増減傾向	—	
	6 月の発生量 (平年比)	—	
予報の根拠			

調査結果

今期と平年の推移



過去2年の推移




・発生施設率：60.0%（平年値：26.5%）

防除のポイント

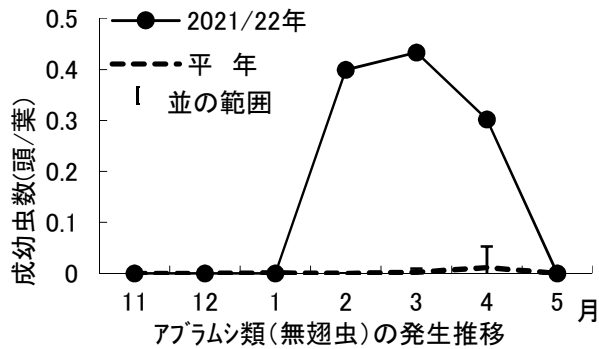
- ・本種は吸汁により果実表面にケロイド状の被害を生じるほか、灰白色斑紋病を媒介する。
- ・施設周辺の雑草は本種の発生源になるため除去する。
- ・多発すると防除が困難になるので、つる先や葉裏をよく観察し、早期発見・防除に努める。
- ・薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。



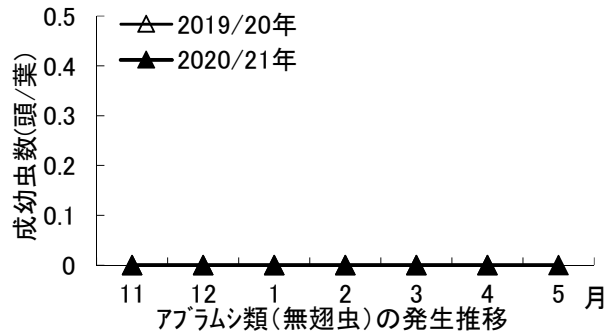
作物	ゴーヤー(施設)		地域	宮古群島
病害虫名	アブラムシ類			
調査結果	5 月の発生量 (平年比)	(発生なし)並		
予報	5 月からの増減傾向	—		
	6 月の発生量 (平年比)	—		
予報の根拠				

調査結果

今年と平年の推移



過去 2 年の推移



・発生施設率：0.0% (平年値：0.0%)

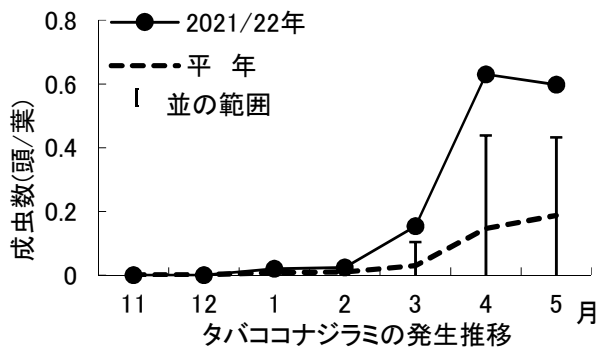
防除のポイント

- ・施設周辺に防風対策を兼ねた防虫ネットやソルゴー等を設置し、有翅虫の飛来侵入を防ぐ。
- ・葉裏をよく観察し、早期発見・防除に努める。
- ・施設周辺の雑草はアブラムシ類の発生源になるので除去する。
- ・本種はウイルス病を媒介する。

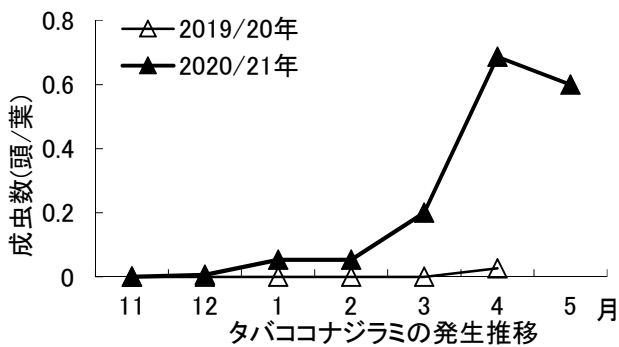
作物	ゴーヤー(施設)	地域	宮古群島
病害虫名	タバココナジラミ		
調査結果	5 月の発生量 (平年比)	やや多	
予報	5 月からの増減傾向	—	
	6 月の発生量 (平年比)	—	
予報の根拠			

調査結果

今期と平年の推移



過去 2 年の推移



- ・発生施設率：40.0% (平年値：26.5%)
- ・一部施設で多発生

防除のポイント

- ・多くの雑草が発生源となりうるので、施設内外の雑草除去に努める。
- ・黄色粘着テープ等により、早期発見・防除に努める。
- ・幼虫は下位葉の葉裏に多いことに留意しながら薬剤散布を行う。
- ・薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避け、気門封鎖系等の薬剤も利用する。